

## 高齢者の時間的態度と主観的幸福感の関連について

原 田 一 郎<sup>1)</sup>

### 【目的】

人は、未来を見通して将来の計画を立てたり、過去を振り返って現在の行動にその反省をいかすといった能力を持つ。このような、現在の行動に影響を及ぼす、未来や過去を見通す能力は、時間的展望という心理学的な概念として古くから研究されてきた。最初に時間的展望の概念を提示したのはFrank (1939)である。Frankによると、時間的展望とは未来・過去を視野に入れることであるとされる。また、Lewin (1951)は、個人の行動を生活空間 (Life space) によって表されるものであるとしたが、この生活空間における、現在の行動を動機づける未来・過去への広がり認知として、Frankの時間的展望の概念を取り入れている。

時間的展望は、様々な下位概念に分類されるが、そのひとつに、時間的態度が挙げられる。時間的態度は、過去・現在・未来に対する感情的評価を指す。従来の研究において時間的態度は、過去・現在・未来の重要性を意識的に順序づけることを意味する、時間的指向性との区別が明確にされないことが多かった。このような、時間的展望の下位概念の分類と先行研究のレビューについては、白井 (1995) に詳しい。

しかし、近年では、時間的態度を、時間的指向性と明確に区別した研究が多く見られる。時間的態度を測定する尺度として、SD法を用いた時間的態度尺度 (Nuttin & Lens, 1985; 都筑, 1991) や、時間的展望体験尺度 (白井, 1994) などが作成されている。これらの尺度を用いた青年期研究では、時間的態度は、青年期の自我同一性や基本的信頼などの心理発達の要因や、その他の人格特性に関連するという結果が得られている (杉山・神田, 1996; 谷, 1998; 都筑, 1993)。

また、近年の時間的態度研究において、青年期を対象とした研究とともに盛んなのは、各発達段階を対象とした、生涯発達の観点に基づく研究である。このような

研究では、年齢とともに時間的態度は変化するという知見が得られている。例えば、Lomranz, Friedman, Gitter, Shmotkin, & Medini (1985) は、児童期から老年期までの時間的態度の変化についてSD法を用いて測定し、年齢に伴って未来に対する肯定的評価は減少し、過去に対する肯定的評価が増大することを示した。また、白井 (1997) は青年期から老年期までの時間的態度の変化について調査し、未来・過去に対する肯定的評価は老年期になると低下するが、現在に対する肯定的評価は老年期になっても低下しないことを見出している。

ところで、山口 (1996) は、高齢者の時間的展望自体が、青年とは質的に異なるのではないかと述べている。高齢者と青年を比較すると、社会的・身体的特徴や、これまでに生きてきた時間や体験、これから先の人生の長さなど、多くの文脈で違いがあることは明らかである。また、高齢者は、青年に比べて、配偶者との死別や就職状況など、個人がおかれている環境が多様化していると思われる。高齢者の時間的態度の特徴や、それに関連する変数についての調査は、これからの課題である。しかし、生涯発達の観点に基づいた研究は、青年期・成人期を主な対象としたものや、発達段階全体、あるいはその一部分の比較を取り扱ったものが多く、高齢者を主な対象としているものは、数少ない。また、時間的態度を測定する尺度も、青年期を対象として作成された尺度を高齢者にも用いるなど、どの発達段階に対しても同じ尺度を用いた研究がほとんどである。これらのことから、高齢者の時間的態度を中心に扱った研究はこれまでほとんどみられておらず、また、高齢者を対象として時間的態度を測定する尺度はこれまで作成されていないのが、現状であるといえよう。まず、時間的態度の研究における課題として、主に青年を対象として作成された、従来の時間的態度尺度を用いて、高齢者の時間的態度を測定することが可能であるか、検討することが急務である。

一方で、老年期研究の分野では、時間に対する評価の概念が、性や年齢、社会的立場など的高齢者の基本的属性との関連から取り上げられることが多い。例えば、下仲・村瀬 (1975, 1976) は老人の自己概念について調査

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程1年)

し、居宅している高齢者は、施設に入所している高齢者に比べて、過去・現在・未来の自己イメージが肯定的であることや、老年期前期・後期で自己イメージの特徴に性差がみられることを見出した。また、河野・金川(1988)は、健康高齢者と虚弱高齢者を対象として主観的な時間の捉え方を測定し、高齢者の時間に対する認知には、性や年齢、生活自立度が影響を及ぼしていることを見出している。時間的態度を、時間に対する評価の一種であると捉えると、時間的態度も、他の時間に対する評価の概念と同様に、高齢者の基本的属性に関連する変数であると考えられる。では、時間的態度は、高齢者の基本的属性とどのような関連を持つであろうか。このような側面から、高齢者の時間的態度について知ることは、高齢者に対する理解を深めるのに役立つであろう。

また、老年期研究においては、高齢者の適応的な老後の暮らし方が、幸福な老い (successful aging) の概念として、検討されてきた。このような幸福な老いの概念を規定し、測定するために、主に、主観的幸福感 (subjective well-being) と呼ばれる、高齢者の主観的な生活の質の評価法が用いられている。主観的幸福感を測定する尺度としては、PGC モラールスケール (Philadelphia Geriatric Center Morale Scale; Lawton, 1972, 1975) や主観的幸福感尺度 K (Life Satisfaction Index K; 古谷野・柴田・芳賀・須山, 1989, 1990) などが作成されている。河野・金川(1988)は、高齢者の主観的な生活の質は、主観的幸福感だけでなく、複数の切り口から評価するべきであるとしている。高齢者が、未来・現在・過去に対して持つ感情は、自らの人生に対する評価であることから、幸福な老いに結びつく概念であると考えられる。時間的態度は、新たな高齢者の主観的な生活の質の評価の切り口となるかもしれない。そこで、本研究では、主観的な生活の質の評価との関連の側面から、高齢者の時間的態度について検討する。

以上から、高齢者の時間的態度について、その下位概念と性や年齢・社会的要因や、主観的幸福感などの適応との関連について検討することは、高齢者の時間に対する評価について理解を進め、幸福な老いについての理解を進めるという老年期研究の流れからも、また、時間的展望の生涯発達研究の流れからも意義があることと思われる。そこで本研究は、高齢者の時間的態度について、(1) 主に青年期を対象として作成されている従来の時間的態度尺度によって測定することが可能であるか検討すること、(2) 性・年齢・健康状態などの基本的属性の関連について探索的に検討すること、また、(3) 幸福な老いと関連する概念であるか検討すること、を目的とする。

## 【方法】

### 1. 質問紙の構成

**時間的展望体験尺度** 高齢者でも比較的回答が容易であると考えられることから、時間的態度を測定する尺度として、白井(1994)の作成した時間的展望体験尺度18項目を用いた。時間的展望体験尺度は、主に青年期を対象として作成された時間的態度尺度で、未来については「希望」・「目標指向性」、現在については「現在の充実感」、過去については「過去受容」という、時間的態度の4つの側面を区別して測定する。「あてはまらない」から「あてはまる」までの5段階評定(1~5点)で、得点が高い方が、時間的展望は肯定的である。

**生活満足度尺度 K (Life Satisfaction Index K; LSIK)** 高齢者の適応の指標として、古谷野・柴田・芳賀・須山(1989, 1990)の作成したLSIKを用いた。「人生全体についての満足感」「心理的安定」「老いについての評価」の3次元、計9項目で構成される。答え方は7項目が「はい」「いいえ」の2段階評定、1項目が「ほとんどない」~「たくさんある」の3段階評定、1項目が「満足できる」~「満足できない」の3段階評定となっており、あらかじめ定められた評価基準により、各項目に0点または1点を与える。合計得点が高い方が、主観的幸福感が高い。

**フェイスシート** フェイスシートでは、老年期研究において基本的属性として用いられることが多い、年齢、性別、配偶者の有無、職業の有無、健康状態を尋ねた。

### 2. 調査対象

N 市市内の60歳以上の高齢者が利用する6施設において、質問紙調査を行った。調査は、6施設中5施設においては返送用の封筒を質問紙とともに配布、調査者が質問紙への記入方法と郵送方法を説明し、回答後、各被験者に質問紙を返送してもらう方法で行った。また、残りの1施設については、施設内に回収箱を設置し、被験者に次回来所した時に質問紙を持参してもらう方法を用いた。質問紙は6施設で計400部を配布し、回収されたものは計255部であった(回収率63.8%)。255部のうち、明らかに回答に不備があるものを除き、234名(男性71名、女性159名、不明4名)を分析の対象とした。平均年齢は74.0歳(標準偏差6.1、年齢範囲62歳~89歳)であった。

## 【結果と考察】

### 1. 時間的展望体験尺度の因子構造

時間的展望体験尺度について、固有値の大きさが1以上である因子が5つ認められた。そこで、因子数を3~

資 料

5とする探索的因子分析（主因子解,プロマックス回転）を行った結果, 4因子で解釈するのが妥当であると判断した。2因子以上にわたって.40以上の負荷量を示した項目を除いて, 各因子とも負荷量.40以上の項目を採用した (Table 1)。第1因子は「私には, これから先の計画がだいたいある」などのこれから先の目標に関する項目と, 「これから先には希望が持てる」という将来への期待に関する項目の因子負荷量が高かった。そこで, 未来に対する肯定的な評価という意味をこめて, 「未来の肯定的受容」因子と命名された。第2因子は「毎日が同じことの繰り返しで退屈だ」などの過去・現在・未来

にわたる否定的な項目で構成されるため, 過去・現在・未来の時間全般にわたる物足りなさという意味をこめて, 「時間全般に対する不足感」因子と命名された。第3因子は「今の生活に満足している」など現在の生活に関する項目の因子負荷量が高く, 現在に対する肯定的な評価という意味をこめて, 「現在の充実感」因子と命名された。第4因子は「過去のことはあまり思い出したくない」という過去に関する否定的な項目や, 「これから先のことはあまり考えたくない。」という未来に関する否定的な項目で因子負荷量が高く, 過去や未来への時間的なつながりを否定的に捉えるという意味をこめて, 「時間的

Table 1 時間的展望体験尺度の因子分析結果 (主因子法, プロマックス回転) N=234

項 目	F 1	F 2	F 3	F 4
(未来の肯定的受容: 将来の希望と目標志向性)				
2 私には, これから先の計画がだいたいある	.715	-.052	.108	.029
6 私にはこれから先の目標がある	.693	-.008	.162	.038
14 これから先のためを考えて今から準備していることがある	.683	.090	-.099	-.003
12 これから先には希望が持てる	.622	.017	.217	-.024
(時間全般に対する不足感)				
5 * 毎日が同じことの繰り返しで退屈だ	.018	.800	.113	-.090
10 * これから先は漠然としていてつかみどころがないと思う	-.204	.649	-.101	.024
13 * 毎日がなんとなく過ぎていく	-.270	.594	.265	.031
11 * 私は過去の出来事にこだわっている	.282	.498	-.257	.031
17 * 今の自分は本当の自分ではない気がする	.145	.438	-.250	.226
4 * 私にはこれから先がないような気がする	-.010	.406	-.160	.296
(現在の充実感)				
9 今の生活に満足している	.104	.114	.761	.053
1 毎日の生活が充実している	.086	-.218	.674	.170
(時間的連続性への否定的態度)				
3 * 過去のことはあまり思い出したくない	.044	-.018	.122	.560
16 * これから先のことはあまり考えたくない	-.218	.127	.157	.431
(残余項目)				
8 これから先のことは自分で切り開く自信がある	.420	-.039	.431	.011
18 * 10年後, わたしはどうなっているのかよくわからない	-.014	.089	-.000	.166
15 私は, 自分の過去を受け入れることができる	.182	.115	.338	-.348
7 * 私の過去はつらいことばかりだった	.096	.301	-.138	.298

\* : 逆転項目を示すが, 「時間全般に対する不足感」, 「時間的連続性への否定的態度」の各因子は逆転項目のみで構成されているため, これらの因子については逆転させずにそのまま用いた

因子間相関

	F 1	F 2	F 3
F 2	-.385		
F 3	.367	-.327	
F 4	-.221	.383	-.162

連続性への否定的態度」因子と命名された。各因子に負荷の高い項目得点を合計し、尺度得点とした。それに基づいて $\alpha$ 係数を算出したところ、第1因子から.79、.76、.76、.36となり、第1因子から第3因子までは一応の信頼性があると考えられた。第4因子については、信頼性がかなり低いことから、再検討の必要性があることが示唆された。そこで、本研究では主に、信頼性の高かった第1因子から第3因子までを対象として検討する。

白井(1989)は、青年期を対象とした時間的展望研究の中で、青年期の時間的態度は過去の受容、現在の充実感、未来に対する希望と目標指向性の各側面に分化すると述べている。時間的展望体験尺度は、この仮説に基づいて作成されたものであるが、高齢者を対象として用いた場合、「未来の肯定的受容」、「時間全般に対する不足感」、「現在の充実感」、「時間的連続性に対する否定的態度」の側面に分類されることが、本研究においては示唆された。この結果をもとに、時間的展望体験尺度によって、高齢者の時間的態度の質的側面を測定することが可能であるかという観点から、検討を加える。

まず、未来に対する肯定的な時間的態度と捉えることが可能な「未来の肯定的受容」因子と、現在に対する肯定的な時間的態度と捉えることが可能な「現在の充実感」因子が抽出された。これらの因子は、構成する項目も妥当であり、信頼性も高い。このことから、主に青年期を対象として作成された時間的展望体験尺度を用いても、高齢者の未来と現在に対する時間的態度を測定することは可能であると考えられる。しかしながら、高齢者を対象とした場合は、青年を対象とした場合とは異なり、未来に対する時間的態度は、「目標指向性」と「希望」の各側面には分化しなかった。青年と比較して、高齢者の未来の時間は残り少ないため、青年に比べてこれから先

の人生が短いという高齢者のおかれている状況や、それに対する認知が、未来に対する時間的態度を青年とは異なるものにするのではないだろうか。例えば、「未来の肯定的受容」尺度項目には、「私には、これから先の計画がだいたいある。」「これから先のためを考えて今から準備していることがある。」などの目標に関する項目が含まれるが、これらの中に出てくる「計画」や「準備」の意味合いは青年と高齢者では異なると考える方が自然であろう。高齢者にとっての「計画」や「準備」には、人生の終わりを視野に入れた上で立てられた、もしくは終わりそのものに関連する目標が含まれると考えられる。高齢者の持つ「目標」が、青年とは異なると捉えた場合、高齢者と青年では未来に対する時間的態度のあり方が異なっていることは十分に考えられる。高齢者の未来に対する時間的態度の質的側面については、今後さらに検討することが必要であろう。

次に、過去に対する時間的態度は因子として抽出されなかった。高齢者を対象として時間的展望体験尺度の因子分析を行った山口(1996)でも、未来についての時間的態度は目標と希望に分化せず、過去に対する時間的態度の因子は抽出されなかった。異なる高齢者のサンプルを対象として時間的展望体験尺度を用いた研究で、同様の結果が得られたことから、高齢者の未来に対する時間的態度は目標と希望に分化せず、また、高齢者を対象として過去に対する時間的態度を測定するには、時間的展望体験尺度の項目では不十分であるといえよう。また、本研究では、青年では見られない、過去・現在・未来の時間全般に渡る時間的態度であると考えられる「時間全般に対する不足感」因子が抽出された。このことから、高齢者の時間的態度には、人生全体にわたる「物足りなさ」、「ものさみしさ」のような時間全般に対する評価の

Table 2 時間的展望体験尺度下位尺度間相関

	時間全般に対する不足感	現在の充実感	時間的連続性への否定的態度
未来の肯定的受容	-.381***	.411***	-.157*
時間全般に対する不足感		-.300***	.306***
現在の充実感			.058

\*:  $p < .05$  \*\*\*:  $p < .001$

Table 3 時間的展望体験尺度下位尺度間偏相関  
(時間全般に対する不足感尺度を除外)

	現在の充実感	時間的連続性への否定的態度
未来の肯定的受容	.332***	-.053
現在の充実感		.166*

\*:  $p < .05$  \*\*\*:  $p < .001$

側面もあると考えられる。以上のことから、過去に対する時間的態度の測定を含め、高齢者の時間的態度の質的側面についてさらに検討を進めることが必要であろう。

次に、時間的展望体験尺度の各下位尺度間相関を算出した (Table 2)。「現在の充実感」尺度と「時間的連続性への否定的態度」尺度の相関は見られなかったが、「未来の肯定的受容」尺度と「時間的連続性への否定的態度」尺度の相関が5%水準で有意であり、それ以外の各下位尺度間の相関は全て0.1%水準で有意であった。この結果から、高齢者の時間的態度の各側面は、互いに関連していることが示唆された。また、「時間全般に対する不足感」尺度が他の下位尺度と強い相関が見られた。「時間全般に対する不足感」は時間全般を見通す時間的態度であることから、過去・現在・未来という時間の各次元に対する時間的態度に影響を及ぼしていると考えられる。そこで「未来の肯定的受容」と「現在の充実感」の関係性を明確にするために、「時間全般に対する不足感」尺度の影響を統制して、各下位尺度間の偏相関係数を算出した (Table 3)。その結果、「未来の肯定的受容」尺度と「現在の充実感」尺度間の相関は有意であった。よって、「時間全般に対する不足感」によらず、高齢者の未来に対する時間的態度と現在に対する時間的態度は、関連を持つことが明らかとなった。

## 2. 時間的態度と基本的属性の関連

フェイスシートによって測定された各基本的属性の特徴を Table 4 に示す。時間的展望体験尺度の各下位尺度について、これらの基本的属性を説明変数とした数量化 I 類を行ったところ、Table 5 に示した結果が得られた。なお、本分析においては、各基本的属性に不明な部分がある被験者は分析から除外した。また、年齢は、被験者の平均年齢である74歳までの群とそれよりも年齢が上の群に区分した。その結果、「未来の肯定的受容」尺

度は年齢・就職状況・身体的健康が、「時間全般に対する不足感」尺度は配偶者の有無・身体的健康が、「現在の充実感」尺度は性差と身体的健康が、有意な説明変数となった。なお、「時間的連続性への否定的態度」尺度については、有意な説明変数は見られなかった。

これらの結果から、「時間的連続性への否定的態度」を除く高齢者の時間的態度の各側面に、健康状態が影響を及ぼしていることが示された。それらをまとめると、健康状態への評価が高い方が、未来や現在に対する時間的態度が肯定的であり、人生全般に対する物足りなさを感じにくいといえる。本研究において測定した健康状態は、医者客観的診断などに対して、被験者が自分自身

Table 4 高齢者群の基本的属性人数 N=234

属性	人数	割合 (%)
年齢	60~74歳	123人 (52.6%)
	75歳以上	107 (45.7%)
	不明	4 (1.7%)
性別	男性	71 (30.3%)
	女性	159 (67.9%)
	不明	4 (1.7%)
配偶者	有	124 (53.0%)
	無	105 (44.9%)
	不明	5 (2.1%)
同居人	有	125 (53.4%)
	無	104 (44.4%)
	不明	5 (2.1%)
就職状況	している	38 (16.2%)
	していない	191 (81.6%)
	不明	5 (2.1%)
健康状態	病気がち	25 (10.7%)
	普通	160 (68.4%)
	良好	46 (19.7%)
	不明	3 (1.3%)

Table 5 時間的展望体験尺度の各因子に関連する基本的属性 (数量化 I 類)

	未来の肯定的受容	不足感	現在の充実感	時間的連続性への否定的態度
年齢 ~74... 75~... 1	-.096*	.094	-.001	.039
性差 男性... 0 女性... 1	-.261	-.525	.517*	.463
配偶者の有無 有... 0 無... 1	-.035	2.437**	-.298	.302
同居人の有無 有... 0 無... 1	-.044	-.063	.091	.033
就職状況 職有... 0 職無... 1	-.186**	1.618**	-.200	-.053
身体的健康 悪い... 1 ~ よい... 3	1.246**	-1.644**	.468*	-.174
重相関係数	.123	.146	.053	.045
F 値	4.79***	5.77***	2.02	1.72

(数値は標準偏回帰係数) \*:  $p < .05$  \*\*:  $p < .01$  \*\*\*:  $p < .001$

注: 身体的健康のみ、重回帰分析を用いている

## 高齢者の時間的態度と主観的幸福感の関連について

の健康を評価する主観的健康感と呼ばれるものである。Larson (1978) は、高齢者の適応と主観的幸福感についてレビューした論文の中で、主観的健康感が高齢者の適応の重要な指標であることが、様々な研究において見出されていると述べている。高齢者の時間的態度が、主観的健康感と関連するという本研究の示唆は、時間的態度を、高齢者の適応的な生活という観点から検討することの意義を示しているといえよう。

また、以下では、健康状態以外の基本的属性と時間的態度の各下位尺度で関係があったものについて検討する。「未来の肯定的受容」尺度は年齢が若い方が、また、仕事についている者の方が高くなることが示された。高齢者にとって、年齢が若いことは、これから先の生きていく時間の長さに関係し、また、就職しているということは、社会との結びつきが強いということを示していると考えられる。時間が残されていること、社会における役割があることは、高齢者が未来を肯定的に評価する上で重要な役割を果たすのであろう。また、「時間全般に対する不足感」尺度は、配偶者がいない方が高くなる傾向にあることが示された。河合・下仲・中里 (1996) は、老年期における死に対する態度について調査し、配偶者がいない方が、現世に期待感や満足感を持ちにくく、回避手段として死を受容しようとする傾向が高いことを報告している。この結果は、配偶者の有無と生きることへの価値づけの関連と言う意味で、本研究の結果と同一線上にあると考えられる。生活を共にしていく配偶者が存

在していないことは、現世だけでなく、人生全体に物足りなさを感じ、生きていく気力を減少させることにつながるのかもしれない。また、「現在の充実感」尺度については男性に比べて、女性の方が高い傾向にあることが示され、時間的態度に性差が関わることが示唆された。

### 3. 時間的態度と主観的幸福感の関連

LSIK については古谷野ら (1990) によって因子構造の不変性が立証されているので、それによって定められた項目で構成される3つの下位尺度（「人生全体についての満足感」「心理的安定」「老いについての評価」）を分析に用いることとした。また、時間的態度と全体的な主観的幸福感の関連を検討するため、LSIKの全ての項目を「主観的幸福感」尺度として用いた。

時間的展望体験尺度とLSIKの下位尺度間相関をTable 6に示す。「時間的連続性に対する否定的態度」尺度以外の時間的展望体験尺度の下位尺度と、LSIKの下位尺度との間に、全て有意な相関が見られた。主観的幸福感との関連が見られたことから、高齢者の時間的態度は、高齢者の幸福な老いに関わる概念であると考えられた。

また、「時間全般に対する不足感」が現在・未来の時間的態度と強い相関を持っていたことから、LSIKと時間的態度の下位尺度同士の関係にも、「時間全般に対する不足感」が影響を及ぼしていることが考えられる。そこで「時間全般に対する不足感」尺度の影響を統制し、

Table 6 時間的展望体験尺度とLSIKの下位尺度間相関

	LSIK			
	人生全体についての満足感	心理的安定	老いについての評価	全対的な主観的幸福感
未来の肯定的受容	.223**	.198**	.258***	.296***
時間全般に対する不足感	-.418***	-.335***	-.282***	-.472***
現在の充実感	.368***	.235**	.228**	.383***
時間的連続性への否定的態度	-.110	-.223***	-.026	-.165*

\*:  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$  \*\*\* :  $p < .001$

Table 7 時間的展望体験尺度とLSIKの下位尺度間偏相関  
(時間全般に対する不足感尺度を除外)

	LSIK			
	人生全体についての満足感	心理的安定	老いについての評価	全対的な主観的幸福感
未来の肯定的受容	.84	.106	.180*	.162*
現在の充実感	.265***	.149	.152	.279***
時間的連続性への否定的態度	-.039	-.142	-.062	-.019

\*:  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$  \*\*\* :  $p < .001$

時間的展望体験尺度の下位尺度と LSIK の下位尺度の偏相関係数を算出した (Table 7)。その結果、時間的展望体験尺度と LSIK の下位尺度偏相関の多くは有意ではなくなり、「時間全般に対する不足感」の影響が大きいたことが示唆された。つまり、時間全般に対して物足りなさを感じる人ほど、人生や生活に対する充足感、老いについての肯定的な評価といった主観的幸福感を感じにくいと言える。現在や未来といった時間の各次元に対する時間的態度は、時間全般に対する物足りなさを感じることを影響を受けることで、人生や生活に対する充足感と関連を持つのであろう。

しかし、「時間全般に対する不足感」の影響を統制しても、「未来の肯定的受容」尺度と「老いについての評価」尺度、「現在の充実感」尺度と「人生全体についての満足感」尺度には、有意な正の相関が見られた。また、「現在の充実感」、「未来の肯定的受容」は、「全体的な主観的幸福感」とも関連を示した。これらから、現在・未来に対する時間的態度は、それ自体が全体的な主観的幸福感と関連し、かつ、それぞれ主観的幸福感の別の下位概念と関連することが示された。未来を肯定的に捉えている方が、老いについての評価が肯定的であるという本研究の結果は、年老いてこれから先も「老い」の中を生きていく高齢者にとっては、「老い」が未来と直接結びつく概念であることを示しているのであろう。また、現在を充実したものと感じている方が、人生全体についての満足感が高いことが示された。本研究の結果は、現在の自分を肯定的に捉えることは、これまでの人生全体に対する意味づけに関連する要因であることを示していると考えられる。

### 【本研究のまとめと今後の課題】

本研究では、高齢者の時間的態度について、その構造と、基本的属性や主観的幸福感との関連を検討した。以下に、本研究から得られた知見と今後の課題についてまとめる。

まず、時間的態度については、高齢者を対象にして時間的展望体験尺度を用いた場合、未来・現在についての時間的態度は因子としてまとまったものの、過去についての時間的態度は測定できないことが示唆された。また、「時間全般に対する不足感」という因子が抽出され、未来に対する時間的態度が「希望」と「目標指向性」に分化しなかった点で、青年を対象として時間的展望体験尺度を用いた場合とは、異なる結果が得られた。したがって、高齢者の時間的態度は、青年とは質的に異なり、時間的展望体験尺度ではとらえられない側面もあると考えられる。高齢者の時間的態度の質的側面についてさらに

検討を進め、尺度を作成することが、今後の課題であろう。

次に、高齢者の時間的態度に関連する基本的属性として、年齢や性差、主観的健康感、就職の有無、配偶者の有無が示された。しかし、本研究で取り上げた基本的属性は、ごく基本的な要因である。人生全体を通じた経験やコホート要因、また、その人の持つ内的な規範なども含め、さらに多くの基本的属性と時間的態度の関連について検討する必要があるだろう。

また、高齢者の時間的態度が、主観的健康感や主観的幸福感と関連をもつという本研究の結果から、高齢者の時間的態度は、幸福な老いに関連する概念であることが推測される。古谷野 (1989) は既存の主観的幸福感尺度を検討し、主観的幸福感の下位概念を「認知-感情」と「短期-長期」の2軸で分類している。時間的態度と主観的幸福感の異なる下位概念同士が関連するという本研究の結果は、主観的幸福感の下位概念は過去・現在・未来という時間軸からも分類することができることを示唆しているといえよう。また、その逆に、時間的態度については、「認知-感情」「長期-短期」の軸から下位概念の分類を検討することもできるかもしれない。主観的幸福感と時間的態度の下位概念を分類する軸の検討を進めていく必要があるだろう。

以上のように、本研究では、高齢者の時間的態度について、その構造や、基本的属性や主観的幸福感との関連についての多くの知見が得られた。同時に、いくつかの点が今後の課題としてあげられた。特に、高齢者の時間的態度の下位概念を確立させること、高齢者を対象として時間的態度を測定することが可能な時間的態度測定尺度を作成することが、第一に求められる。その上で、高齢者の時間的態度の下位概念と、本研究で扱った要因との関連を再検討し、また、より多くの要因との関連について明らかにすることが必要であろう。

### 引用文献

- Frank, L. K. 1939 Time Perspective. *Journal of Philosophy*, 4, 293-312.
- 河合千恵子・下仲順子・中里克治 1996 老年期おける死に対する態度 老年社会科学, 17, 107-116.
- 河野あゆみ・金川克子 1998 在宅高齢者の主観的時間に関する研究 - 性, 年齢, 日常生活自立度との検討 - 老年社会科学, 20, 25-31.
- 古谷野亘・柴田博・芳賀博・須山靖男 1989 生活満足度尺度の構造 老年社会科学, 11, 99-115.

- 古谷野巨・柴田博・芳賀博・須山靖男 1990 生活満足度尺度の構造—因子構造の不変性—老年社会科学, 12, 102-116.
- Larson, R. 1978 Thirty Years of Research on the Subjective Well-being of older Americans. *Journal of Gerontology*, 33, 109-125.
- Lawton, M. P. 1972 The Dimensions of moral. In D. P. Kent, R. Karstenbaum, & S. Sherwood (Eds.) *Reserch Planning and Action for the Elderly: The Power and Potential of Social Science*. Behaviorial Publication.
- Lawton, M. P. 1975 The Philadelphia Geriatric Center Moral Scale: A revision. *Journal of Gerontology*, 30, 85-89.
- Lewin, K. 1951 *Field Theory in Social Science: Selected Theoretical Papers*. New York: Harper.
- Lomranz, J., Friedman, A., Gitter, G., Shmotkin, D., & Medini, G. 1985 The meaning of time-related concepts across the life-span: An Israeli sample. *International Journal of Aging and Human Development*, 21, 87-107.
- Nuttin, J. R. & Lens, W. 1985 *Future Time Perspective and Motivation*. Leuven/hillsdale: Leuven University Press/Erbaum.
- 下仲順子・村瀬孝雄 1975 SCTによる老人の自己概念の研究. *教育心理学研究*, 23, 36-45.
- 下仲順子・村瀬孝雄 1976 加齢と性差よりみた老人の自己概念. *教育心理学研究*, 24, 156-165.
- 白井利明 1989 現代青年の時間的展望の構造(1) —大学生と専門学校生を対象に— 大阪教育大学紀要(第IV部門), 38, 21-28.
- 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 *心理学研究*, 65, 54-60.
- 白井利明 1995 時間的展望と動機づけ —未来が行動を動機づけるのか— *心理学評論*, 38, 194-213.
- 白井利明 1997 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房
- 杉山 成・神田信彦 1996 青年期における一般的統制感と時間的展望 —アパシー傾向との関連性— *教育心理学研究*, 44, 418-424.
- 谷 冬彦 1998 青年期における基本的信頼感と時間的展望. *発達心理学研究*, 9, 35-44.
- 都筑 学 1991 青年期の時間的展望の研究 —Circles Testについての検討— *教育学論集* (中央大学教育学研究会), 33, 145-162.
- 都筑 学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望 *教育心理学研究*, 41, 40-48.
- 山口智子 1996 高齢者の回想: 主観的幸福感・時間的展望との関連 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 43, 163-173.

(2001年9月20日 受稿)



ABSTRACT

A study of time attitude in old-aged persons  
: Relationships between time attitude and subjective well-being.

Ichiro HARADA

The purpose of this paper was to make clear the structure of time attitude in old-aged persons and examine how this correlates with age, gender, health and subjective well-being which was an index of successful aging. 234 old-aged persons, ranging in age from 62 to 89, living in Nagoya City, Aichi responded to Experiential Time Perspective Scale, Life Satisfaction Index K (LSIK) and face seat. The main results were as follows: (1) Factor analysis of items of Experiential Time Perspective Scale yielded four factors: "affirmative acceptance of future", "present-fullness", "feeling of shortage to the whole time" and "negative attitude to temporal continuation". (2) The results of quantification method of the first type showed that age, gender, health, employment status, and marital status have significant influences on time attitude of old-aged persons. (3) There were positive significant correlation between subscales of Experiential Time Perspective Scale and subscales of LSIK. "Affirmative acceptance of future" and "present-fullness" were significant positive correlation and "feeling of shortage to the whole time" was significant negative correlation with all subscales of LSIK. The results suggested that the idea of time attitude correlated with subjective well-being.

Key words: time attitude, successful aging, subjective well-being, Experiential Time Perspective Scale